
ユメウツツ

藤村 彰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメウツツ

【Nコード】

N3901K

【作者名】

藤村 彰

【あらすじ】

「先生」のもとに集まった六人の少年少女のそれぞれの物語。

プロローグ

「よし、ここだな。」

桜の花びらが舞う、四月初め。

いま僕は、白くて大きな建物の前に立っている。

いったい何なのだろうこの建物は。不思議な形をしている。

逆三角形と砂時計を合わせたような、とても歪な形。

こんなもんが小高い山の上にぽつねんと建っているのは中々シュールだと思っただが。

しかしずっと眺めていても何かわかるでもなし、仕方がないので中に入ることにした。

中は、病院を思わせるような清潔で明るいつくりだった。

前に言われていた通りに、真っ正面にある受け付けに行き、紹介状を見せる。

すると、少し無愛想なお姉さんが、階数と部屋番号を告げた。

「エレベーターは左手にあります」

どうやらそこへ行けということらしい。

軽く礼を言つて、左手に向かった。言われた階でエレベーターを降りたが、はて、部屋はどこにあるのだろうか。

少し歩いただけでも今自分がどこにいるのかわからない。まるで迷路だ。

しかも、部屋番号の付け方に全く規則性がみつけれないのだ。これではここに勤めている人も迷うのではないだろうか。

さすがに誰かに聞こうかと思って人を探していたら、後ろから声をかけられた。

振り向くと大きな体とパーマがかった金髪のロングヘアが目に入った。

先生だ。

「遅刻よ。迷ったのかしら？」

巨体を揺らしながら先生は近づいてくる。歩くごとに白衣の下から鮮やかなピンク色のブリーツカットが見えた。相変わらず派手だ。

「すみません、ちょっと……」
言い淀んで笑って誤魔化する。

「まあいいわ。入って。」

そう言っ先生は目の前の部屋のドアを開けた。って、目の前だったのか。灯台もと暗しだな。

その六畳ほどの部屋はどうやら資料室のようで、段ボールがいたるところに積んであった。

「いやあでも本当にありがとうねえ。6人志願者見つけるの、結構

大変だったのよう」

「いえ、こちらこそありがたいお話です。」

「これから週に一回くらいは、あたしのところに来てもらってからね、よろしく頼むわよ！」

そう言うと、腰に手をあてて先生はにいつと笑った。
こちらにも笑い返す。

さて、さっきから気になっていたことをひとつ。

「他のメンバーはまだ来てないんですか？」

「まさか。全員私の研究室いるわ。行きましよう。」

じゃあなぜこの部屋に連れてきたんだ。二度手間じゃないかと考えていたら、先生は僕の腕にどっしりと段ボールを置いた。
重い。

書類が大量に入っているんじゃないだろうか。

「これ、持っていてね」

…そういうことですか。

部屋はそれほど離れてはいなかった。

遅刻した罰で両手がふさがっているので先生にドアを開けて入れてもらう。

先生の研究室は意外と地味というか、ちょっと狭い保健室みたいな感じだった。

部屋の真ん中あたりに、女の子三人と男子二人が手持ちぶさたな感じで立っている。

小柄で華奢な二つ結びの女の子、すらりと背の高いポニーテールの女の子、ショートカットでボーイッシュな女の子。

あと小柄な眼鏡くんと色黒なそばかすくん。

何気なく観察をしながら軽く会釈をして段ボールを下に置く。

「待たせたわね。それじゃ、初顔合わせということで」

自己紹介ということに相成った。

先生はぐるっと全体を見渡し、

「じゃ、葵ちゃんから時計回りにいきましょう。」

と言って近くにいた少女の肩を叩いた。

どうやら“あおいちゃん”というらしい小柄な彼女は、先生に促されて落ち着いた声で言った。

「二ノ宮葵です。今年から大学二年生になりました。色々と至らないところがあるかと思いますが、よろしく願います。」

礼儀正しく深々と頭まで下げた。左右耳の高さで結んである髪が華奢な彼女の肩にかかる。

小さな体に気をとられていたが、彼女は自分と同学年のような。確かに顔をよく見ると年相応に見える。服装だって、女子大生向け

の雑誌に載ってそうな白いワンピースだった。

「というか結構かわいい子じゃないか。ああ芸能人のあのこに似てるな、なんだっけ名前…」

と、思い出しかけたところで、大きな声が響いた。

「はい次！うちは三島りさ！花も恥じらう中二の十四歳！血液型はB型！身長160センチ！仲良うしてください！」

一息にショートカットの女の子は言ってしまった。

今のたった一言で彼女がかなり元気っ娘であることと、どうやら関西出身らしいことがわかった。

パーカーにジーンズというラフな格好で、ひまわりみたいな満面の笑みを浮かべている。

そうかと思うとくるりと大袈裟に半回転し、次、キミやで、と隣の少年を指差した。

面白い子だ。

せつつかれた側の少年は、三島りさを少し見た後、ゆっくりこちらに顔を向けた。

「…五月女義親、中学二年生です。よろしくお願いします。」

薄い茶色の髪の毛をした小さな頭をぺこりと下げる。

とても静かな声だった。

三島りさの直後だから、ということもあるだろうが、随分と対照的だった。

顔を上げて眼鏡を直した五月女義親は、今度は隣の少年をちらりと

見た。

視線を感じてか少し戸惑いつつも、

「穴道俊輔。高校二年。」

そうぼそつと言った。

そして黒髪、短髪、浅黒い顔のこの少年は、両手をポケットにつっこんだまま頭をほんの少しわかるかわからない程度に下げた。

恥ずかしいのだろうか、目線も下を向いたままだ。

「内野七海、高三です。ナナミとかナナとか呼んでください。」

背の高い、ポニーテールの少女が首を横に傾けてかわいらしく言った。

しかしモデルみたいだな。卵形の顔は驚く程小さいし、ショートパンスの下からは長くて白い脚がのびている。

全体的に非常に女性的なラインをした体つきだ。

華のある子だな、と思った。

ぼやっとしていたら、全員の視線が徐々に自分に集まるのを感じて、慌てて言った。

「一ノ瀬司です。二ノ宮さんと同じ大学二年生です。これから一年間、同じテスターとしての実務、及び共同生活、どうぞよろしくお願ひします。」

どんな一年に、なるのだろうか。それはきっと、神様にもわからない。

プロローグ 2

自己紹介の後は“テスト”とやらをやらされた。
何だったんだろう、あれは。少し疲れた。

その後はみんなで外食した。

先生が八人乗りのバンを出してくれた。

店は、小さなイタリアンレストランで、照明が少し薄暗くなんだかお洒落な感じだった。

暖かい日だし、せっかくだから、と言って先生は僕たちをテラスの席に案内した。

テラスからは満開の桜が見えた。

夜桜だ。

店の庭に植えてあるらしいそれは、下からライトアップされ、上からは月の光があたり、とても幻想的な雰囲気放っていた。

僕はもとより女の子たちは、すごいだのきれいだの歓喜の声をあげて騒いでいた。

店は食事も値段がそう高くないわりには美味しくて驚いた。
ただそんなことよりももっと驚くことがあった。

三島りさが大変なお喋りだということだ。

バンに乗った時から彼女は歌ったり、窓から顔をだしたりせせこましかったのだが、食事中にはそのせせこまさが全部口に集中したらしい。

そう思うくらいに、とにかく彼女は間断なく喋り続けた。

自分は大阪から来たこと、わざわざ転校してきたこと、両親を説得するのにすごく骨が折れたこと、両親が先生と知り合いだったから結局上手くいったこと。

転校した先では水泳部に入ること、どうやらその中学は五月女と一緒であるらしいこと。

まだあった気がするが、これらのことを機関銃のようにしゃべり続けた。

啞然とはしたが、別に不快ではなかった。

彼女は話すのが上手いのだ。何でもないようなことでも笑いに変えてしまうくらいに。

それに彼女は常にしゃべり続けてはいたが、“彼女だけ”がしゃべっていたわけではなかった。

三島は自分の話を軸に色んな人に質問を振り、茶々をいれては笑いを取り、また自分の話にもっていつていた。

お蔭で、“初対面”という緊急はすっかりほぐれ全体的にだいぶ打ち解けた。

おそろべし女子中学生パワーである。

さらには、

「ななみちゃん」

「あおいちゃん」

「りさちゃん」

なんて、女の子連中はもうお互いを下の名前で呼び合うまでになっている。

しかし困ったことに僕は、思春期オーラ全開の宍道、そもそも人間に興味がなさそうな五月女とはついぞ打ち解けることができなかった。

ワインを飲んでしまった先生のかわりに、帰路は僕がハンドルを握った。

まだ引越しが済んでいないため、今日はみんな研究所の休憩室に泊まることになっている。

先生は僕の隣で酔いのためか船を漕いでいる。
こつくりこつくりする度に大きな体が揺れて面白い。

あんだだけ喋りまくったにも関わらず、二列目の三島の口を閉じることはなかった。

ところどころ二ノ宮さんと七海の声が交じる。

一番後ろの宍道と五月女は対照的にだんまりだ。
中高生は、お互いに交流する気はあまりないらしい。

僕は小さくため息をついた。

ここは自分が歩みよらなければ。三島みたいに。

ふと、女子中学生を目標にする男子大学生という言葉を思いつき、
今度は苦笑した。

経過報告

第一日目。

被験者は以下の六名

イチノセ ツカサ

二ノミヤ アオイ

ウチノ ナナミ

シンジ シュンスケ

サオトメ ヨシチカ

ミシマ リサ

今回は初回ということもあり、導入テストのみを行った。
その結果を記録する。

なお、装置、システムに異常はなかった。

イチノセ…平均的数値。異常なし。

二ノミヤ…非常に安定。異常なし。

ナナミ…平均的数値。異常なし。

シンジ…やや安定にかける。他は異常なし。

サオトメ…さざ波のよう。異常なし。

ミシマ…かなり不安定な状態。拒絶反応あり。要観察。

報告は以上。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3901k/>

ユメウツツ

2010年10月12日05時45分発行